平成 29 年度　国際関係論専攻　研究助成金
調査・研究報告書

【受給者】B1766614 白山彩
【所属】グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻博士前期課程 1 年
【研究課題】ハワイの帰米二世による戦後日系人社会との関わり

調査背景・先行研究

これまでの帰米二世（日系アメリカ人二世の中でも一度日本に暮らしアメリカへ帰った人々）の先行研究は、本土に帰った帰米の研究が中心だった。また、帰米が日本に留学していた時期に注目する戦前の研究（東 2005,2012）や、帰米がアメリカ本土で収容所に入れられたことに着目する戦中の研究（デイ 2000）が多く、戦後に関する帰米の研究は少なかった。これらの研究は帰米をグループとして見ており、他の 442 部隊などで戦った二世と帰米を比べ、帰米のマイナス面ばかりを強調する傾向にあった。ハワイ州（以下、ハワイ）の帰米に関しては鈴木(2004)の研究があるが個人それぞれに深く迫った論文ではなかった。よって、報告者は帰米個々人の具体的な例を見たいと思った。

そこで報告者は、ハワイの帰米二世がハワイに帰った後どのような暮らしをしたかについて調査をするために、2017 年 9 月 3 日～9 月 10 日にハワイ州ホノルル市周辺でフィールドワークを行った。フィールドワークではハワイ大学マノア校図書館やハワイ日本文化センターで帰米や戦後の生活についての資料を収集した。ハワイ在住のジャーナリスト鈴木啓氏にお会いすることができ、以前鈴木氏が日本語新聞「ハワイ・パシフィック・プレス」で連載していた「帰米二世の素顔」シリーズの新聞記事を収集することが出来た。そのシリーズは著名な帰米 12 人のライフストーリーのインタビューを紹介している。9 月 6 日には元日本語新聞「ハワイ報知」5代目社長で戦後帰米 A 氏にインタビューすることが出来た。A 氏は学生時代全てを日本で過ごしたことから今でも日本語の方が英語より得意だったため、インタビューは日本語で行った。ハワイ報知オフィスで行い、インタビュー時間は約 1 時間 18 分だった。インタビューの形式として鈴木氏、A 氏、私の3人で行った。インタビューでは、A 氏の生い立ちやハワイにおける日本語新聞の重要性についてお聞きすることができた。

調査目的

以上のフィールドワークでの調査結果を踏まえ、報告者は 2017 年 12 月 9 日の日本移民学会冬季研究大会で報告を行った。この日本移民学会冬季研究大会は若手研究者の萌芽的な研究の発表を目的としている大会である。場所は京都府の私立同志社大学で行われた。申し込み時には発表タイトルと 800 字程度のプロポーザルを送り採用された。報告時間は 25 分間で質疑応答は 15 分間だった。本報告のタイトルは「ハワイ帰米二世による戦後日系人社会への貢献―インタビューから読み取れること」だった。本学会で報告を行ったことにより、先行研究と自分の研究の違

いを整理し、学会で得た質問を参考にして今後の研究を深めていくことを目的とした。

調査・研究報告

学会では、ハワイの帰米が戦後日系人社会でどのような貢献をしたかを中心の内容にしたかったので、帰米が戦後深く関わった職業である元日本語新聞社長 A 氏と旅館業 B 氏に絞って報告することにした。

ハワイの日本語新聞は、戦前は日系人の権益を守る役割を担っていたと A 氏はおっしゃっていた。A 氏は戦後からハワイ報知に勤めたため戦前の貢献に直接関わってはいないが、戦後、戦前のハワイ報知の特徴を存続させた。戦後は戦争花嫁が来たことによりハワイにおける日本語の必要性は高まり、日本語新聞は大きな恩恵を受けた。多くの帰米が新移民とそれまでの日系コミュニティ(一世、二世)の仲介役としての利点を活かし日本語新聞の記者となった。しかし、現在ハワイの日本語新聞は減っており、ハワイ報知のライバルであった「ハワイタイムズ」も 1982 年日刊が廃刊された。そのような状況の中、A 氏は長年社長としてハワイ報知を存続させ、日本語新聞を守ってきた。インタビューからは社長時代の苦労が伺え、報告ではインタビュー内容を紹介した。

B 氏の旅館業も戦前・戦後で状況が変わった。B 氏は 1928~1938 年の 10 年間を日本で過ごした後、ハワイのダウンタウンで父から受け継いだ「B 旅館」の 4 代目館主となった。戦前から 1950 年代までは、他の島の日系人が日本に行く前に B 旅館に泊まることが多かった。1960 年代は飛行機が主流になり、それまでのようなハワイの日系人が日本に行く前の宿泊はなくなった。その代わりに 1964 年に日本人の海外旅行が自由化され、徐々にダウンタウンの旅館からワイキキのホテルに移っていった。B 氏もこの状況に対応し日本の観光客向けの B ホテルをワイキキに作り、B 旅行社を設立した(ハワイ・パシフィック・プレス:1999.4.1)。また、B 氏は戦後数々の日系人団体の会長も務めていた。

以上 A 氏・B 氏それぞれを説明した後は二人の違いについて述べた。A 氏は戦後になってからも、日系人社会に還元できるよう日本語新聞を作り貢献しハワイ社会の日系コミュニティのみを対象としていた。B 氏は旅館業の生き残りのため 1960 年代からは日系人だけではなく日本人観光客もビジネスの対象となった。そして B 氏は戦後数々の日系人団体の会長も務めており、日系人社会にも貢献していることから、A 氏とは違い日系人社会・日米関係両方を対象としていた。よって、今回報告した帰米二人は戦後日本語能力を活かした職業につき、日系人・日米社会に貢献したと言える。このように個人を見ることにより、日本での経験をマイナスとして捉えてはいない帰米がいることが分かった。

学会報告ではこのような帰米の戦後の活動を「貢献」と表現したが、ハワイの帰米は戦後日本語コミュニティの中でのみ貢献をしたと捉えることが出来る。また、今回職業に注目したことで帰米が関わっている社会(日系人社会、日米社会)について分かったので、今後はハワイ日系人の戦後のビジネス(例:日本語新聞・観光業)と関連させながら帰米を考えていきたい。